さてと、始めますか。
この語りを聞いている人は、恐らく夜空を見ながらワイングラスでも傾けているだろう。
それとも、海辺に佇んで、その傍らにいる大切な人と手を繋いで、光飛沫を見ているのかもしれない。
なんだっていい。
語れることがない人以上に淋しいのはあまりよろしくないからね。
語れることがある人はとても頑張った証でもあるのだから。
それにしても、今日の空は朱くもなく、そして、蒼くもなく。
それほどに、感情が昂るよ。
どこからでも始められる、物語を語ることは幸福感の問題ではないけれど。
きっとね？　価値観なんて誰もが同じなんだよ。
同じだからこそ、共感とはあるのだから。
朱い空の下で遊ぶ子供たちを眺めていると、ここは公園だった。
蒼い空の下で転がって話し合っている恋人を眺めていると、ここは草原だった。
そして、ここに、一つの石碑がある。
そこに描かれている絵だけが真実なんだ。

その絵を今、ここで語ってしまったら、物語の全てがわかってしまうからね。
だから、最後に言うよ。
それでは、始めましょう。

大空を駆け巡る鳥を見つめていると、蒼さも、紅さも気付かないぐらいに、それに夢中になってしまうものだ。
外の景色はいつも、夢中になるもので支配されているんだと、このパソコン画面を見ながら虚しく思う。
そう思いながら、崩れていくブロックを見ていると、隣で呆れた表情でジェンガをしている誰かが私を見る。
「あんた、いつになったら、そのブロックを積み直せるのよ」
「うるしぇです。あたしは、まだあきらめない！」
「諦めんでいいけど、いい加減、外の景色をジェンガで表現をするなんて辞めたら？」
「まるで人間を辞めろと言っている感じにしか聞こえません。だから、あたしはがんばにゅーー！」
がんばにゅーー、ってなんだ？　と私は思いながらこのパソコン画面に映っている映像の加工処理を終えた。今日の仕事はここで終わりかな？

娘はどうやら、口が動きながら、器用にもそのジェンガを妻に見せびらかせていた。文句か、がんばにゅーー、か。
スーツ姿のまま、呆れかえった妻は、その手にある野菜を使ってジェンガと組み合わせていた。いや、あんたもかい。そうツッコまずにはいられない。
「それで、何でお前まで娘の手助けているんだ」
とにかく疑問だったため、聞いてみる。いや、色々と私も感じるのだよ。
「貴女は何の気なしに言うけど、この世界はとても広大だったんだね。大昔、まだ、人類が男という存在がいたって話、言わなかったっけ？」
「いや、そこじゃない。それに女が女と子供を産めることなんざ、当たり前だろ」
「説明文乙」
「お主もな」
「うむ、それは言いの訳が出来ない世界に帰ってきて」
「どこだ、それ」
「この世界には、ありふれた親父集がする人がいるってこと」
「オヤジを集めて男の人形でも作るのか？」
「何を言ってんの」
「すまん」

「当たり前でしょ」
「前言撤回。貴様はやはり馬鹿だ」
「気にしないで、いつものこと」
　と、無駄にしか思えない会話を繰り返し、いずれも面白くもなかったため、私は、溜め息をつきながら、このノートパソコンを閉じた。無駄に赤く、無駄にグラデーションで、無駄に大きいので、持ち運びが不便なこのノートパソコンは、今でも重用している。ツッコみたいだろう？
「まぁ、茜。ご飯を作ってくれ」
「がんばにゅーー」
「お前は、娘を叱る気があるのか？」
「がんばにゅーー」
「……はぁ。まぁいいけどな」
　私は、溜め息をつきながら、その手に野菜を持っている娘らしき妻にバッグを渡す。手が野菜まみれになっている、この妻は一体何がしたいのかさっぱり理解できないのは今に始まったわけではない。
　そんなことを思いながら、外を見る。
　雀色時になっている空がゆっくりと陽を落としている頃、家の蛍光灯がちらちらと部屋の中

を照らしていた。